

〈翻訳〉

マルブランシュ『真理の探求』「序文」

筒井 一穂

ここに訳出するのは、17世紀後半から18世紀初頭に活動したフランスの哲学者、マルブランシュ（Nicolas de Malebranche, 1638–1715）の処女作であり主著『真理の探求論 *De la Recherche de la Vérité* : そこでは、人間精神の本性、および学問において過誤を避けるためになされねばならない精神の用い方が論じられる』（1674）の「序文 *Préface*」である。1674年に前半の3巻が、75年に後半の3巻が刊行され、その存命中には第6版（1712）まで重版された（出版回数としては7回）。版を重ねるごとに、主に読者とのやりとりの中で気づかれたのであろう、本文中の不明点、不足点に関する補論として、都合17項目の「解明 *éclaircissement*」が付された。これらを合わせると以下の通りの構成となり、全集版で三冊分に及ぶ大著である。

序文

第一巻 感覚について

第二巻 想像力について

第三巻 知性すなわち純粹精神について

第四巻 傾向性、すなわち精神の自然的運動について

第五巻 情念について

第六巻 方法について

解明 1–17

本書が哲学の歴史に与えた影響は、もはや言うまでもない。アウグスティヌス（主義）とデカルト（主義）という優れて17世紀的な思潮を先鋭的な仕方で引き継ぎ、ヒュー

ム、ルソー、カントを筆頭とする18世紀の哲学を準備したことは紛れもなくマルブランシュの功績であるが、彼を代表するわけでも独創的な学説、例えば「叡智的延長」の説、「機会原因論」、「すべての事物を神のうちに見る」理説、「内的感得」による「昏いコギト」の自己認識、等々が明に暗に語り出されるのは、まさに本書においてである。本稿に訳出された「序文」は、本書の動機や目的や立場を宣言すると同時に、その思想的な前提を、ざっくばらんに、均整のとれた簡明な文体で提示する。「序文」だけからでも、本書のいわゆる「光の形而上学」的傾向や、「人間の学」の構想などをはじめ、重要な論点を数多く拾い出すことができるだろう。

凡例

- ・ 各段落ごとに、便宜上文頭にアラビア数字で番号を振る。
- ・ 原文中で強調を表す大文字には傍点を付す。
- ・ 原文中で引用を表すイタリックは鉤括弧「」内に記す。
- ・ 原文中で別の著述家のテキストが引用、言及される際には、アスタリスク*を附し、各段落の終わりにその邦訳を記す。
- ・ 訳者注はアラビア数字を附し、脚注に書き込む。
- ・ 原語を併記する際には、丸括弧（）内に記す。
- ・ 訳者による補いは、角括弧[]内に記す。単純な付加の場合はそのまま記し(e.g.「さて、[たしかに]人間の精神は…」)、代名詞や言い換えの内容をあえて補った場合は、等号を用いる(e.g.「この後者の [=神と精神の]合一こそが…」)。
- ・ 亀甲括弧〔〕や丸括弧内の日本語などは、原文で用いられていたものであり、引用者にはよらない。
- ・ 文献の略記法については本稿末尾を参照。

序文

1.

人間の精神はその本性上、創造主と物的被造物のあいだに位置するものと認められる。というのは、聖アウグスティヌスによれば、それより上には神を除けば何もなく、それより下には物体を除けば何もないからである*。さて、一方で人間の精神はその大なる高貴さ（*élévation*）において他の一切の物的事物の上にあるが、だからといってこのことは、精神が物体に合一すること、それどころか何らかの仕方で物質の或る部位¹に依存してさえいること、これらのことを妨げはしない。他方で、至高の存在と人間の精神とのあいだには無限の隔たりが認められるが、だからといってこのことは、精神が神に直接的に、ごく親密な仕方で²合一することを妨げはしない。まさにこの後者の〔=神と精神の〕合一こそが精神を物体よりも高くに引き上げる（*élever*）のであって、これによって精神はその生命、光、あらゆる至福を受け取るのである。聖アウグスティヌスは、その著作の至るところで、神と精神の合一こそが精神にとってこの上なく本性的でこの上なく本質的な合一だとわれわれに語っている**。反対に、精神の物体との合一は、人間を無限に引き下げる（*abaisser*）のであって、これがこんにちの人間のあらゆる過誤³とあらゆる悲惨の主要な原因なのである。

*「ところで、理性的魂よりもよりいっそうすぐれているものは、すべてのひとの

-
- 1 「部位」と訳したその原語は、「*portion*」である。この語は大きく二つの意味をもち、「分け前、割り当て、取り分」と、「(数えられない物の)部分」(たとえば線分「*portion de droite*」)である(DAF 1694; Robert 1988)。この箇所を後者でとったのは、類似の用例がアンブロシウスに見られることによる。段落12の引用を参照。
 - 2 「ごく親密な仕方で」と訳したその原語は、「*d'une manière très-intime*」である。「*intime*」という形容詞はラテン語「*intimus*」に由来し、その第一義は「内奥の」とか「内側の」とか「深くの」とかいったものだが、これが人間同士の関係に適應されるとき、「親密」を意味する。ここでは、「…な仕方で *d'une manière*」とうまく対応させるために親密と訳したが、原語においては、精神の「奥の奥で」、神との合一が見られるという、そのような含みもあるように思われる。
 - 3 「過誤」と訳したその原語は、「*erreur*」である。この語と区別して、ラテン語「*fallor*」に対応する動詞「*tromper*」は「欺く」と、「*se tromper*」は「(欺かれ)誤る」とでもしたいところだが、冗長なので「誤る」と、形容詞「*faux*」は「虚偽に満ちた」と訳した。これを訳し分けることは、デカルト『省察』の翻訳に学んだ(Descartes 2004, 46)。

一致した見解によれば、神である」アウグスティヌス『魂の不滅 *De immortalitate animæ*』13, (22) (『著作集』2, 42)。

「理性的な魂は神によらなければ幸いを得ないこと、身体は魂によらなければ成長しないこと、また神と身体との間にはある中間物があり、それは魂であることが、以上述べたことでもって確実となったので、あなたがたは心を傾け、私と一緒に思い出してほしい」アウグスティヌス『ヨハネによる福音書講解説教 *In Iohannis Evangelium tractatus CXXIV*』第23説教6 (『著作集』23, 412)。

**たとえば以下。また、段落2の引用を参照。

「神よ、あなたから離れ去ることは死ぬこと、あなたのもとに帰り行くことは甦ること、あなたのうちに住むことは生きることである」アウグスティヌス『ソリロキア *Soliloquia*』第1巻第1章第3節 (『著作集』1, 332)。

「それゆえ、誰であろうと、最高にして神の神を次のように考える哲学者たち——すなわち、神を被造物の創造者、あらゆる認識の光、あらゆる行為の〔究極的〕善であると考え、その神によってわたしたちが自然の原理や教えの真理や生の幸福を持つものとなるを考える哲学者たち——そうした哲学者がより適切にプラトン派と呼ばれようと、また、彼らが自分たちの学派に別の名称をつけようと…わたしたちはこうした人々のすべてを彼ら以外のものたちよりもすぐれた位置におき、わたしたちに近い人たちであると認めるのである」アウグスティヌス『神の国 *De Civitate Dei*』第8巻第9章 (Augustinus 2014-1, 上, 392)。

2.

公衆や異教の哲学者が、みずからの魂が神とのあいだにもつ関係と合一とを認めず、もっぱら魂における身体との合一ばかりを考慮に入れていてもわたしは愕然とはしない (*s'étonner*)。だがキリスト教の哲学者が、人間精神よりも神の精神を、アリストテレスよりもモーセを、異教の哲学者の悲惨な註釈家よりも聖アウグスティヌスを彼らは好まねばならないはずなのに、魂を身体の形相とみなしておきながら、神の似姿⁴に即して神の似姿のために作られたもの、すなわちアウグスティヌスによれば*

4 「似姿」と訳したその原語は «image» である。たとえば本書第一部第四章における認識論的

魂がそれに対してのみ直接に合一しているところの真理⁵のために作られたもの、とはみなさないこと、このことには驚愕させられる (être surpris)。なるほど魂が身体へと合一し、それを本性的に「形相づけている」⁶のは真実だが、いっそう緊密⁷にしていっそう本質的な仕方で魂が神へと合一していること、これもまた真実である。[しかも、]精神の身体との関係はなくともよいのに対して、精神の神への関係はきわめて本質的であり、それなしに神が精神を創造することができたと考えることが不可能なほどなのである。

*「…しかしすべて [の事物] が、類似性に向けて (ad ipsam similitudinem) 創られたのではなく、ただ理性的存在だけが、類似性に向けて創られたのである。だからすべてが類似性によって創られたのではなく、魂だけが類似性に向けて創られたのである。だから理性的存在がつくられたのは、類似性によってでもあり、また類似性に向けてでもある。というのも何らかの本性が間に介在して創られたのではないからである」アウグスティヌス『未完の創世記逐語注解 *De Genesi ad litteram Imperfectus Liber*』第16章, 59–60 (『著作集』17, 199)。

「それら [=存在するところのすべてのもの] の中でも人間は神の像 (imago)、似姿 (similitudo) に従って創造されたと最も正しい意味で言われる。なぜなら、そうでなければ人間は不変の真理を〔自らの〕精神によって見るができないか

な議論における場合などは「像」と訳した方がよいだろうが、ここは神学的議論であるので以上のように訳した。なお、序文のうちこの語はここにしか登場しない。

- 5 「真理」と訳したその原語は «vérité» である。複数形 «vérités» で書かれる場合は必ず「諸真理」と訳し、区別する。
- 6 「形相づける」と訳したその原語 (の不定形) は «former» である。ふつうであれば「形作る」とか「作り出す」とか「形状をなす」といった意味をもつ動詞だが、人間の精神が身体を形作っていると読むのは奇妙である。ここでは、哲学の用語としての「形相 forma/forme」を与える、という意味で使われているとみる。この用法は、ラテン語の動詞 «formare» にみられるもので (DMLBS 項目 8)、たとえばスコトゥス『第一原理についての論考』では、この動詞の完了分詞が「形相化されたもの fomatum」と訳されている (1.15. Scotus 2019, 476)。
- 7 「緊密に」と訳したその原語 (の男性単数形) は、«étroit» である。この語は、原義は「ほとんど幅のないもの Qui a peu de largeur」で、「狭い通り Chemin étroit」や「きつい靴 des souliers trop étroits」などの言い回しがある (DAF 1762)。これが比喩的に、主に人間同士の関係について言われると、「親しい友人」、「仲の良い家族」、「強い団結」といった具合に用いられ (DAF 1762)、日本語のいわゆる「絆」のようなものを意味する。マルブランシュの用法は、おそらくこの後者に類する比喩的なものであり、段落 1 の «intime» の言い換えである。

らである」アウグスティヌス『真の宗教 *De Vera Religione*』44, (82) (『著作集』2, 371)

3.

神は自分自身のためにしか活動 (*agir*) できないこと、神は自らを認識し (*connaître*) 愛する (*aimer*) ためでなければ精神を創造できないこと、神は自らのためでなく、また神自らに向かわないようないかなる認識をも精神に与えることはできず、またそのようないかなる愛をも精神に刻み込むことができないこと、これらのことは明らかである⁸。だが神は、いまは身体と合一している精神を、身体へと合一させないでおくことはできたはずである。このように、精神が神に対してもつ関係は本性的であり、必然的⁹であり、また絶対的に不可欠なものであるのだが、われわれの精神が身体に対してもつ関係は、われわれの精神にとっていかに本性的であるにしても、絶対的には必然的でも不可欠でもない。

4.

ここで物体と合一することよりも神と合一することのほうがいっそうわれわれの精神の本性に適すると信じさせることができるあらゆる権威や理由を持ち出すべきではない。これらの[権威や理由といった]事柄は、われわれをあまりに遠くへ連れて行ってしまおうだろう。真理を明るみに出すには、異教の哲学の主要な諸基礎を破壊し、罪が無秩序であることを説明し、ひと¹⁰が誤って経験と呼ぶものを反駁し、感覚からく

8 「明らか」と訳したその原語は « *évident* » である。この語はデカルトの用語においては「明証的」と訳するのが通例だけれども (たとえば、デカルト『省察』, Descartes 2001-2, 92)、ここではわりあい型にはまらない仕方 で用いられているとみて、そのように訳した。

9 「必然的」と訳したその原語は « *nécessaire* » である。この箇所では、精神が神に関係しないことができない、という意味で、つまりは一箇の様相として、訳した。本序文の別の箇所では「必須」と訳した (この訳は、たとえばデカルト『省察』, Descartes 2004, 166 に倣う、けれども、所のように、「必然的 *necessarius*」と「必須 *nécessé*」とを区別することは、マルブランシュの言葉遣いからして、採用できなかった) ことを断っておく。

10 「ひと」と訳したその原語は « *on* » である。この人称代名詞は本序文に頻出するが、その用法は辞書に従い整理すれば概ね三つある。人間一般を指す « *l'homme* » に類する表現の代用、不特定の個人を指す « *quelqu'un* » の代用、一人称複数 « *nous* » の代用、一人称単数 « *je* » の代用である。それぞれ順に、「ひとびと」もしくは「ひと」、「或るひと」、「われわれ」、「私」と文脈に従って訳し分け、一々断らなかつた。本序文において一人称単数の人称代

る先入見と幻想とに抗して理性的に推論することが必須だろう。[しかし、] このように、この真理をふつうのひとびと (commun des hommes) に完全に把握 (comprendre) させるのは、一序文のなかで試みるにはあまりに困難なことである。

5.

しかしながら、真の哲学に通暁し注意深い精神をもつ者たち¹¹ に対してならば、この真理を証明するのは難しくない。というのも彼らに対しては、神の意志が各々の事物の本性を規則づけている¹² のであり、[ところで、] すでに述べたように、神が精神を作ったのは物体に形相を与える¹³ ためよりもむしろ神を認識し愛するためなのだから、[したがって、] 真理を認識し善を愛することを通じて神へと合一することが、物体へと合一することよりもいっそう魂の本性に適う、と思い出させて (souvenir) やれば十分だからである。この証明は、多少とも照らされた精神をもつ者たちに対してならば、彼らをまずは揺さぶって注意深くさせ、次に説き伏せることができるのだが、他方、自らに感得されるものしか認識できない、肉と血からなる精神を似たような推論によってどうにか説き伏せることは、実際生活の上では¹⁴ 不可能である。このたぐ

名詞 «je» の用例は多くないが、その数カ所に関しては「わたし」と平仮名で訳した(段落2, 16(原注), 23, 24, 30, 37, 39. ただし、段落11の成句的表現 «je veux dire» は「言ってみれば」とした)。

- 11 「注意深い精神をもつ者たち」と訳したその原語は «des esprits attentifs» である。哲学的文脈における «esprit» は通常、単数系で「精神」、複数形で「(動物) 精気」と訳すことが多いが、本箇所はこのいずれにもあたらない。DAF (1694) の «esprit» の項には、「しばしば人を意味する」とされ、「その叙述や著作における品格 politesse によって、大衆 commun から区別される人」を意味する «Beaux esprits» や、「大衆の意見や格率よりも高位にある者」を意味する «Esprits forts» などの用例が挙げられている。いずれにしても、肯定的な形容詞とともに言われる «esprit» は、何らかの優れた素養や品性や見識に恵まれた人物を指す。これを踏まえた上で、ここでは «esprit» がマルブランシュ哲学にとっての重要なタームであるということもあって、「精神」の語を表に出す訳を選んだ。
- 12 「規則づける」と訳したその原語 (の不定形) は «régler» である。DAF (1694) は、第一義を「紙、羊皮紙、犢皮紙、厚紙に規則的に直線 [= 罫線] を引くこと」とした上で、第二義に、「何らかの規則にしたがって指揮すること conduire、統制すること diriger」を挙げている。ここでの用法はもちろんこの第二義にあたる。
- 13 「形相を与える」と訳したその原語は «informer» である。先述の「形相づける former」(段落2) とほぼ同じ意味に解した上で、訳し分けた。
- 14 「実際生活の上では」と訳したその原語は «moralement» である。この語の定義について、DAF (1694) から DAF (1798) までは基本的に一致して、大きく二義を挙げている。ひとつ

いのひとびとには、彼らの感覚に印象を刻まないいかなるものも堅固とは思われないのだから、もっと粗野で感覚的な¹⁵ 証明が求められるのである。

6.

われわれの精神の神との合一は、最初の人間の罪によって弱められてしまったので、いまやこれを感じ得ることができるのは、心 (cœur) が純化され精神が照らされたひとびとだけである*。というのは、感覚の判断と情念の運動に盲目的に従うひとびとにとっては、この合一は架空のもの (imaginaire) と思われてしまうからである。

*「確かに人間の精神は、父の似像であり、類似性であると言われる真理そのものにしかつき従わない (精神がこれを感じるのは、きわめて純粹で至福であるときだけだが)』『未完の創世記逐語注解』第16章, 60 (『著作集』17, 199)。

は、「理性の光にのみ従って」であり (こちらの語釈は、DAF 1835 以降なくなり、代わりに「道徳規範に従って」となる)、またひとつは «moralement parlant» の省略形として、「真実らしく vraisemblablement、あらゆる現れ apparences に従って」である。記者はこの箇所での «moralement impossible» が DAF における第二義だとみるが、それは、議論の内容の面から見ても、少なくとも道徳はここでの主題ではないし、字面の上から見ても、まさに «moralement impossible» の用例が、DAF の第二義に挙げられているからである。その上で、「実際生活の上では」という訳語は、デカルト『方法叙説』第五部 (Descartes 2001-1, 57, 58) の用例に倣った。その記者三宅・小池によれば、この語は «mœurs» に由来するが、これは特定の社会集団における風俗・しきたりと、個々人の生き方との両方を意味し、個人性と集団性、実態性と規範性が絡み合う、含みの多い語である (Descartes 2001-1, 82)。「実際生活の上で」との訳は、この実態性の側面を強調したものであり、DAF の整理に則れば、どちらかと言えば第二義にあたる。このことは本箇所でも同様である。ただし本箇所での «moralement impossible» は、何も実際生活とは別の場面においては可能であるという含みをもつとは限らない (つまり、実践-理論といった対比が念頭に置かれているわけではない) ため、若干ミスリーディングな訳語かもしれない。むしろ、「私に現れているもの、見えているものに基づいて判定するかぎりでは、ありえない」といったことが意味されていると思われる。ともあれ、適当な訳語が見当たらず、さしあたり既訳に倣い、こうしたくどくどしい説明を付することとした次第である。

- 15 「感覚的な」と訳したその原語は «sensible» である。この語についての DAF (1694) の語釈は、第一に「感覚能力をもつもの」、第二に「感覚を刺激するもの」、第三に「道徳的な事柄において言われる (「つらい苦しみ」とか「際立った喜び」とか)」用法、第四に「感覚ないし理性によって容易に知られる事柄」である。本箇所の «sensible» は、この第四のものとして捉えられるのが最も素直だろう。ただし、「感覚もしくは感覚的経験に訴えるような証明」と読むなら、第二の用法で読めないこともない。

7.

かたやわれわれの精神の身体との合一は、罪によって強められてしまったので、われわれ自信をなしているこの二つの部分が、あたかも同一の実体に他ならないかのようにわれわれにはみえる。もっと言えば、罪はわれわれを自身の感覚と情念とに隷属させて、身体がわれわれを複合するふたつの部分のうち主要なものだとわれわれが信じ込むように仕向けたのである。

8.

ひとびとの種々の仕事についてえ考えてみれば、彼らが自分自身についてごく低俗でごく粗野な意見をもっていると信ずべき立派な訳 (sujet) がある。というのは、ひとびとは至福と自身の存在の完全性とのすべてを愛していて、なおかつ、いっそう幸福かついっそう完全になるためでなければ労を執らないのだから、[にもかかわらず] 彼らが身体と関係づけられた事物にほとんど常に専念していたり、自身の精神の完全性にとって絶対的に必須な事柄についてほとんどまったく考えていないのを目にするときには、われわれは、彼らが自身の身体および身体にとっての善とを、自身の精神および精神にとっての善とより重視していると判断を下すべきではあるまいか。

9.

大多数の人間があれほど勤勉に苦痛を忍んで働くのは、悲惨な生活に耐え、子供たちが自身の身体を保存するために必須となるいくらかの資産を残しておくためにすぎない。

10.

僥倖 (bonheur) や運 (hazard) に恵まれ、働くことが必須でない者たちといえども、自身の魂をその存在のもっともこの上なく気高い (noble) 部分とみなしていると、自身の勤めや職務を通じて知らしめているわけではない。狩猟、舞踏、賭事、饗宴が彼らの平素の仕事なのである。彼らの魂は、身体の奴隷であって、その魂にまったく見合わないにもかかわらずあらゆる気晴らしを重視し、これに執着する。彼らの魂は

身体は奴隷であるが、それどころか、身体はあらゆる感覚的事物に結びついているのだから、当の身体によって、あるいは身体のおかげで、彼らの魂はあらゆる感覚的な事物の奴隷ともなっている。というのは、まさにこの身体によって彼らは、両親、友人、都市、職務といったあらゆる感覚的善 (biens sensibles) に合一しているからであり、こうした諸々の感覚的善を保存することは、自分の存在を保存することと同等に必須にして重視すべきだと彼らには思われているからである。こうして、自分の魂の完全性よりも、自分の財 (biens) に対する気遣い (soin)、これを増やそうとする欲望、そして栄光ならびに偉大さに惹かれる情念の方に、彼らはいっそう限りなく駆り立てられ専念することになる。

11.

学識者や自身の精神 [の力]¹⁶ を誇る者でさえ、その生活の半分以上は純粋に動物的な活動をして過ごすか、あるいは、自らの精神の完全性よりもむしろ健康や財や名声のようす (état) の方に重きを置いているかのように思わせるような活動をして過ごすものである。彼らが研究に励むのは、自らの精神にいっそうの力と広がり (étendu) をもたせるためよりも、むしろ他人の想像のうちで空想的な偉大さを獲得するためなのだ。彼らは自分の頭をある種の調度品の倉庫として、そのなかに、学識の何らかの特徴を携えたあらゆるもの、言ってみれば、珍奇で特別に見え、他人の驚きを掻き立てることができるようなすべてのものを、分別も秩序もなく積み重ねている。彼らは、骨董品や古物の倉庫に似ることを栄光とするが、それらの品はなんら豊かでも頑丈でもなく、その値打ちはもっぱら空想や情念や運次第で決まるのである。だから彼らが、自らを正しい精神をもつ人物とし、こころの運動を規則づけようと労を執ることはほとんどまったくない。

12.

しかしだからといってひとびとは、自分が魂をもっていて、しかもこの魂が自分の存在の主要な部分であることを知らない (ignore) わけではない*。それにひとびとは、名声や富や健康を何年かのあいだ手にしておくことがさほど著しい利益とはなら

16 DAF (1694) によれば «esprit» には、「理性的魂の諸能力 facultez」や、「想像すること、抱懐することの力量 facilité」を指す用法があり、本箇所もおそらくそれである。

ないことや、あるいは一般的に言って、身体のあらゆる善ならびに身体を通じて身体を原因としてのみ彼らが所有するものが、滅びうる架空の善であることなどを、理性と経験とによって幾度となく思い知らされている。彼らは、富をもつよりも正しくあることが、知識をもつよりも理性的であることが、敏捷で動きやすい身体をもつよりも力強く鋭敏な精神をもつことが、いっそうよいと知っているのである。こうした諸真理が彼らの精神から消え去ることはないし、そう考えることが彼らの気に入るときにはいつでも、不可謬的に発見されるのである。たとえばホメロスは、自分の英雄たちの足が速いことを讃えたが¹⁷、彼が望んだとしたならば、この讃辞が馬や猟犬にも捧げられるべきものだと気づけたはずである。そのお見事な略奪行為で歴史上あれほど有名なアレクサンドロス¹⁸も、取り巻きの従者たちの錯雑とした騒音にもかかわらず、暗殺者や盗人と同様に理性の奥の奥ではしばしば咎めに耳を傾けた。カエサル¹⁹も、自らの野心のために自国の自由を犠牲にするについに決心したとき、ルビコン河を渡るにあたって、同様の咎めが彼を恐れさせたと思えないわけにはいかなかったのである。

*「自分の魂を買い戻すのに、ひとはどんな代価を支払えようか (cf. 『マタイによる福音書』 16 : 26)。魂においては、自分のほんのわずかな部位 (portio) ではなく、人間の総体すべての実体 (totius humanæ universitatis substantia) があるというのに」アンブロシウス『ヘクサエメロン』第6巻第7章, 43 (Ambrosius 1845, 258)。

13.

魂は、いかに身体と緊密な仕方で合一していようと、神と合一するのをやめはしない。だから、情念が吹き込む強壮かつ錯雑とした感得 [= 印象] を身体から受け取るまさにその時でさえ、魂は、自らの精神をつかさどる²⁰ 永遠の真理から*、自らの

17 Rodis-Lewisによれば、ホメロス『イーリアス』第1巻58、「俊足のアキレウス」のくだり (OC 1, 493)。

18 Rodis-Lewisによれば、歴史家クイントゥス・クルティウス・ルフスの『歴史』第4巻11のくだり (OC 1, 493)。

19 Rodis-Lewisによれば、カエサル『内乱記』第1巻8-9のくだり (OC 1, 494)。

20 「…をつかさどる」と訳したその原語 (の不定形) は «présider à» である。まず普通に訳せば、「つかさどる」「支配する」(Robert 1988)、「指揮する direction」(DAF 1694)となり、本稿でもそのように訳した。この場合、われわれの精神の働きを規則づけるいわばア・プリオリな結構として、「永遠の真理」がみなされることとなるように思われる。しかし、

義務と不順な行い²¹ についての認識を受け取るのである。身体が魂を欺くとき、神は魂を欺きから解放する。身体が魂に媚びるとき、神は魂を傷めつける。身体が魂を賞賛し称揚するとき、神は魂の内部に血のにじむような咎めを与え、魂がしたがってしまった肉の法 (loi) よりもいっそう純粹で神聖な法を顕示して、魂を断罪する。

*「真理よ、あなたは、問いたずねるすべてのひとびとに対し、いたるところに座を占め、いろいろ異なる質問を發するすべてのひとびとに、同時に答えたもう。明瞭に、答えたもう。しかしすべてのひとが、明瞭に聞くとはかぎりません。すべてのひとは、自分の聞きたいことをあなたにたずねます。しかしかならずしも、聞きたい答えを、いただくとはかぎりません」アウグスティヌス『告白 *Confessiones*』第10巻第26章 (Augustinus 2014-2, 2, 295)。

14.

アレクサンドロスにとって、スキタイ人が彼に異国語で義務を教えにくる必須はなかった²²。彼は、自らが従うべき正義の規則を、スキタイ人やその他の蛮族さえをも教育したところのまさにそのもの [=神] から、[教えられ] 知っていたからである。世界中を照らす真理の光は、彼自身を照らしもした。自然の声**は、ギリシア語でもスキタイ語でも蛮族の言語でも語らないのだが、他のひとびとにも彼に対しても同様に、すこぶる明晰かつ叡智的な言語で語ったのだ。[なのに、] スキタイ人がアレクサンドロスの振る舞いについて咎めようとしても無駄だった。彼らは彼の耳に語りか

アウグスティヌス『告白』の該当箇所では用いられる動詞 «*praesidere*» は、文字通り「前に-座る」とか、「座を占める」といった意味 (Lewis & Short 1879; Gaffiot 2006) で用いられている。そのため本序文でも (動詞 «*présider*» に位置を示す前置詞 «*à*» が伴われているものとみなし)、「精神に座を占める永遠の真理から…」とでも訳した方が適切だったかもしれない (が、フランス語の語彙からはそのように訳しにくいので、そうはしなかった)。

- 21 「不順な行い」と訳したその原語は «*dérèglements*» である。語の成り立ちからすれば「規則 *règle*」を逸脱することであり、DAF (1835) 以後は Robert も含め多くの辞書が、一般にものごとの不規則性・不調を第一義としているが、それ以前には、DAF (1762) も DCLF (1787) も、第一義として道徳規範に従わないこと、ないし対立すること、を挙げている。なお、複数形での用例は、DAF (1835) にあり、いわゆる「若気のあやまち *Les dérèglements de ce jeune homme*」であるが、これにより、複数形によっていくつかの不道徳な行いが意味される場合があるとわかる。
- 22 Rodis-Lewis は、クイントゥス・クルティウス・ルフスの『歴史』第7巻8を参照している (OC 1, 14)。

けたにすぎなかったのだ。その上、神はアレクサンドロスの心には語りかけなかった。いや、精確に言えば、神は語りかけたのだが、彼はスキタイ人の言葉にしか耳を傾けず、その言葉は彼の情念をいらだたせるばかりで、彼の心を彼自身から外に傾けてしまったので、結局彼は真理の声に驚愕したとしても、それに耳を傾けることはなかった。また [声の場合と同様に]、彼は真理の光が自らに注がれたとしても、それを見ることもなかった。

**「私の内部において、内なる思惟の住処において真理が語るでしょう。しかもそれは、ヘブライ語でもギリシア語でもラテン語でも蛮人の語でもなく、口舌の器官によらず音節のひびきもなしに、「彼は真実を語っている」というでしょう。その声を聞くやいなや、私は確信にみちてあなたのそのひと（モーゼ）にむかい、「あなたは真実を語っている」というでしょう」『告白』第11巻第3章5（Augustinus 2014-2, 3, 16）。

15.

われわれと感覚的事物との合一が増し強まる (augmenter et se fortifier) のに依じて、われわれと神との合一は減じ弱まる (diminuer et s'affaiblir)、このことはなるほど真実である。だが、われわれの存在が破壊されるのでないかぎり、われわれと神との合一が完全に断たれることはありえない。というのは、悪徳のなかに居座り快樂に酔っているひとびとが真理に無頓着だ (insensible) としても、だからといって彼らは真理との合一をやめるわけではないからである*。真理は彼らを見捨てず、彼らが真理を見捨てる。真理の光は闇の中で輝く**が、常に闇を払うわけではない。それはちょうど太陽の光のようなもので、盲人や目を閉じているひとびとを照らすことはなくとも、彼らを取り囲んでいるのである***。

*「その太陽 [=キリスト] が人の内に信仰によって住み始めたときに、それがあなたの憤りの上に沈むほどに、すなわち、キリストがあなたの精神を見捨てるほどに、あなたの内に生まれる憤りがあなたの内で強くなってはならない。なぜなら、キリストはあなたの憤りと共に住むことを欲しないからである。実際、あたかもキリストがあなたから落ちるかのように見られる。もっとも、あなたのほうが彼から落ちるのであるが。なぜなら、怒りが定着したとき、憎悪が生じるからである。憎悪が生じたとき、あなたはすでに人殺しである」アウグスティヌス『詩篇注解

Enarrationes in Psalmos』第25篇, II「民衆への説教」, 3 (『著作集』18/I, 245)。

**「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」『ヨハネによる福音書』1:5。

***「同じように、主キリストも自分を信じている人と敵であるユダヤ人とを、あたかも光と闇とを分けるように、区別したのである。それはあたかも主が信仰の輝きでもって満たしたもうた人々と、その閉ざされた目に光を注いだ人々とを分けるようである。なぜなら、この太陽は見える人の顔を照明すると同様に、見えない人の顔をも照明するからである。二人とも等しく立って顔を太陽に向け、肉において照明されているが、二人とも視覚を照明されてはいない。一方は見、他方は見えない。二人に太陽は現れているが、現れている太陽に対し一方は不在になっている。同じように神の知恵、神の言である主イエス・キリストは至るところに厳然している。なぜなら真理は至るところに存在し、知恵は至るところに存在しているから」アウグスティヌス『ヨハネによる福音書講解説教』第35説教, 4 (『著作集』24, 151)。

16.

われわれの精神と身体との合一についても、事情は同様である[†]。この合一は、われわれと神との合一が増すにつれて減ずる。しかしだからといって、われわれの死によるのでなければ、この合一が完全に断たれることは決してない。というのは、われわれが使徒たちよろしく照らされ、感覚的事物から解き放たれるとしても、われわれの精神が身体に依存しており、われわれの肉の法がわれわれの精神の法に耐えず抵抗し反発するのをわれわれが感得するという、このことは原罪以後にあっては必然的だからである。

† ここで私が精神の神との合一ならびに身体との合一のふたつについて言っていることは、ものごとを考える通常の仕方に従って理解されるべきである。じっさい、精神が直接に合一しうるのは神とだけである、すなわち私が言いたいのは、精神は実のところ神だけにしか依存していない、ということであるが、これは確かに真実である。[しかし他方で] 精神が身体に合一し、あるいは依存しているとしても、その合一を実効的に作った (*faire efficacement*) のは神の意志であり、それが依存に変じたのは原罪以後のこと [にすぎないの] だ、ということである。このことは、

本書が進むにつれて十分に理解されるであろう [原注、第3版以後]。

17.

精神は、神との合一が増すのに比例して、いっそう純粹で、光に満ち、強く、拡がる (étendu) ものとなる。なぜなら、精神の完全性のすべて²³を作るのは神との合一だからである。反対に精神は、身体との合一が増大し強まるにつれて、いっそう腐敗し、盲目になり、弱くなり、縮こまる。なぜなら、精神の不完全性のすべてを作るのは身体との合一だからである。こうして、あらゆる事柄について自らの感覚でもって判断を下し、あらゆる事柄において自らの情念の運動にのみ従い、自らが感得するもののみを受容し、自らに媚びるもののみを愛する、このような者は、彼にとってありうるかぎりでも悲惨な精神の状態²⁴にある。このような事態にあってこの者は、真理および自らのための善から無限に遠ざかっている [からである]。だが他方で或るひとが、精神がもつ純粹な觀念のみによって諸々の事柄について判断を下し、被造物の発する錯雑とした騒音を注意深く避け、感覚と情念の沈黙のなかで自分自身に留まることでもって自らの至高の主人に耳を傾ける、そのようなときには、この者が過誤へと陥ることは不可能である*。

*「実際、自分自身〔の内〕をよくのぞき見たとき、精神の志向を身体感覚から動かし、引き離すことができればできるだけ、ものごとをより真実に理解する〔ことができる〕ということを経験しない人がいるであろうか。だから、もし精神が身体組織的構成要素であるとすれば、そうしたことはまったく起こりうるはずがない」『魂の不滅』第10章,(17) (『著作集』2, 37)。

23 「精神の完全性のすべて」と訳したその原文は «*toute sa perfection*» である。「完全性」は単数形であるので、「すべて」といっても、いくつかの完全性がありそのいずれをも云々する、ということではなくて、一箇の完全性の全体を云々する、ということである。事情は数行下の「精神の不完全性のすべて」についても同様である。

24 「状態」と訳したその原語は «*dispositio*» である。「傾向」や「結構」と訳するのも普通だが、そのような訳は何らかのものもとのつくりを問題にしている観がある。むしろここ(および本序文の他の箇所)では、あくまでも一時的なあり方が問題となっていることから、以上のような訳語を選択した。

18.

入念な傾注をもって、そして自身の精神をすっかり神へと向け変えること²⁵をもって神へと問いかける、そのような者たちに神はいつでも答えを知らしめるとはかぎらないのだが、しかし神が彼らを欺くことは決してない。他方、精神が神に背を向けて、[自らの]外部に散らばり(*répandre*)、自らの身体に対して真理を教えるよう問いかけ、耐えず自分に語りかけてくれる自らの感覚や想像や情念にしか耳を傾けない、そのようなときには、この精神が誤らないということはあるにないのである。[というのは、]知恵や真理や完全性や至福といったものは、ひとが自らの身体から得ることを期待すべきであるような善ではない。[言い換えれば、]われわれの上にあるもの、われわれがそこから存在を受け取ったもの、その存在を完全なものにする(*perfectionner*)ことのできるもの、それはひとりあのもの [=神] をおいて他にないのである。

19.

以上は、聖アウグスティヌスがかの美しい言葉でわれわれに教えていることである。彼は言う。「永遠の知恵は、知性を用いることのできるすべての被造物の原理である。そしてこの知恵は、つねに同じものであり続けるのであって、その被造物が自身の原理のほうへと向かうように、その理性の最も内奥で語りかけることをやめはしない。なぜなら、精神に存在を与え、いわば精神を完成し、精神にとって可能なかぎりこの上ない完全性を精神に与えることができるのは、永遠なる知恵を見ること以外にはないからである。」*

* 以上はフランス語からの訳。ラテン語原文からの訳は以下。「知的な被造物の原理は、永遠の知恵である。そしてこの知恵は自らのうちに不変に留まりつつ、ひそかに霊的に呼びかけることを通して、この知恵を原理とする被造物に語りかけることを決してやめたまわらない。こうしてこの被造物は、自らがその存在を負っているものに身を向けるのであり、このように身を向けることがないなら、形成され、完成

25 「すっかり向け変える」と訳したその原語は«*conversion entière*»である。ラテン語の«*conversio*»は、DMLBSによれば、「宗教的な生に入ること」すなわち「回心」を意味すると同時に、より一般的には、「回転すること、方向を変えること」を意味する。ここでは、神に対する回心が語られていると見るのは自然だが、より一般的な哲学の議論としても読まれる余地を残すことのできる訳語を選択した。

されることはないのである」『創世記逐語注解 *De Genesi ad litteram*』第1巻第5章10（『著作集』16, 15）。

20.

[さらに、] 使徒ヨハネは述べている。「われわれが神をありのままに見るとするならば、われわれは神に似るであろう」*。われわれは、永遠の真理についてのこの観想を通じて、あらゆる霊的な被造物が自らの本性の必然性によって目指している、その度合いの偉大さまで引き上げられるだろう。だが、われわれがこの地上にあるかぎり、身体の重みが精神にのしかかる**。この重みは、自らの神が現前するところ²⁶から、あるいは自らを照らす内的な光から、耐えず精神を遠ざける。加えてこの重みは、あらゆる事物を自らに表象する²⁷ことを、しかも当の諸事物のあるがままにではなく、諸事物が生る保存に対してもつ関係にしたがって表象することを、精神に強いるのである。

*「愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです」『ヨハネの手紙一』3:2。

**「朽ちるからだは魂の重荷となり、地上の幕屋は心配の多い精神に重くのしかかります」『知恵の書』9:15（邦訳, 70）。

26 「現前するところ」と訳したその原語は «présence» である。17世紀においてこの語は普通、「或る場所にひとがいること」を意味し、神についても、それが場所をもたないにもかかわらず、言われる（たとえば «omniprésence» などと言われる場合がこの用法だろう）。加えて、単に神があるというだけでなく、「神のあるところに自らの身を置く *se mettre en la presence de Dieu*」（原文ママ）といった用例もあり、これは「神を、われわれのなすことに居合わせているものとみなす」ことを意味する（DAF 1694）。本稿ではさしあたり、本文での «présence» は後者の用法に近いものとして解した。ちなみに、直後の「表象する *représenter*」（原文ママ）に語の成り立ちからして呼応する。

27 「表象する」と訳したその原語は «représenter»（原文ママ）である。この語は、マルブランシュ研究において、特に物体の認識（「すべてを神のうちに見る」理説）の文脈では、「代提示する」と訳されることがある（木田 2009, 237; および伊藤 1997）。なおその場合には «présenter» は「提示する」と訳される。本稿がこれを採用しなかったのは、一般的な言葉遣いから離れることを懸念したという、もっぱら消極的な理由による。

21.

身体は、「知者*」によれば、精神をあまりに多くの感覚作用で満たすので、ほとんど隠されていない事柄を認識することさえ精神にはできなくなる。身体の視は精神の視を眩まし紛らわしてしまうので、真理を認識するために身体の眼を用いるときには、魂の眼によって何らかの真理を明瞭に知得することは困難になる。このことから分かるのは、ひとり精神の注意のみによって、諸真理のすべてがあらわになり、諸々の学知の全てが学び知られるということである。なぜなら、精神の注意とはじっさい精神の神への回帰であり向き直りだからであり、この神とは、聖アウグスティヌスの言う通り、われわれの唯一の師（Maitre）**であり、自らの実体を顕示することによってわれわれに真理を教えうる唯一のものである***。

*「わたしたちは地にあるものをかろうじておしはかり、手近にあるものも労して見いただきます。天にあるものをだれが探り出せるでしょう。もしあなたが知恵を下さらず、また上からあなたの聖霊を送らなかつたならば、だれがあなたのはかりごとを知りえたでしょう」『知恵の書』9:16-17（邦訳,71）。

**「われわれが知解することのできる普遍的なものについては、われわれはおそらく言葉によって真理と相談するように促されるのであるけれども、われわれは外に響くところのその言葉に相談するのではなく、内奥にあって精神そのものを支配する真理に相談するのである」アウグスティヌス『教師 *De Magistro*』第11章38（『著作集』266）。

「だから、わたしが真理を語り、彼が真理を認識するときでさえ、教えるのはわたしではないのである。彼はわたしの言葉によって教えられるのではなく、神によって彼の内奥に啓示されることによって明らかにされるもの（実在、真理）自身から〔直接〕教えられるのである。」『教師』第12章40（『著作集』2,269）。

***「英知の光なる神よ、すべての英知的に輝くものは、あなたにおいて、あなたによって、あなたを通して英知的に輝く」『ソリロキア』第1巻第1章3（『著作集』1,332）。

「そこで [主イエスは] わたしたちに、人間の魂と理性的精神とを教えられた。こ

れは人間の内にあるが動物の内にはないものである。そしてこれは、神の実体そのものによらなければ成長せず、幸福を得ることなく、照らし出されることもない』『ヨハネによる福音書講解説教』第23説教5（『著作集』23, 411）。

22.

以上すべての事柄を通じて見えてくるのは、われわれが注目し専念すべきもののうちに感覚的なものは何ひとつないのだから、身体が精神に仕掛けるあらゆる努力²⁸に耐えず対抗しなければならぬということ、すなわち、われわれを取り巻き、われわれの傾注と重視に値するかのように感覚が常にわれわれに表象する、そのようなあらゆる物体に関してわれわれの感覚がなす告げ口を信じないように、一步一步習慣づけなければならぬということ、このことである。これは、永遠の知恵が、自らの受肉を通じてわれわれに教えようと望んだと思われる、そのような諸真理のうちのひとつである。というのも、この永遠の知恵は、感覚的な肉を抱懐されうるかぎりこの上なく高い品位へと高めたあとで墮落へとこの肉を至らしめることで、言い換えれば感覚的事物のうちもっとも大いなるものを墮落させることで、われわれが感覚の対象のすべてについて軽蔑をもつべきだと教えたからである*。おそらくこれと同じ理由から、聖パウロは自分がもはやイエス・キリストをその肉によって知っているのではないと言ったのである**。というのは、われわれが注目すべきなのはイエス・キリストの肉ではなく、その肉に隠された精神だからである。聖アウグスティヌスは、「肉はキリストのもっていたものの器であって、キリストで在ったところのものではないことに注意せよ」と述べている***。イエス・キリストにおける可視的で可感的なものがわれわれの称賛に値するのは、ひとり精神のみの対象であるところの御言葉との合一のゆえに他ならないのである。

*「ところで、権威は一部は神的であり、一部は人間的である。しかし、真実で堅固である最高の権威こそ、神と名づけられるのである。この権威においては、空中にただよう〔ある霊的な〕生きものの不思議な欺瞞は恐れられなければならない。こ

28 「努力」と訳したその原語は«effort»である。DAF (1694)によれば、この語は「物体ないし精神の活動 actions」を意味するとされる。哲学の文脈では、ラテン語«conatus»の訳語としても用いられる。ここではその点を考慮し、「conatus」に一般的に当てられる訳語を選んだ（例えば、スピノザ『エチカ』第4部定理26、Spinoza 2014 下, 41; ホブズ『物体論第3部第15章』Hobbes 2015, 241）。

れは、身体の感覚そのものに達する事物の一種の占いやその他少なからぬ力によって、失われ行く財産を求め魂や、こわれやすい権力を求め魂や、空い奇蹟を恐怖する魂などを、いとも容易に欺くのが常なのである。それゆえに、かの権威こそ神的と言われなければならない。それは感覚されうるしるしにおいては、すべての人間的能力を超えているばかりでなく、また人間自身をも導いて、人間にどの程度まで人間自身のために自らを賤しくなしたもうたかを明示するのである。それはまた、感覚——これに対してのみそれらは不思議と見えるにすぎないのである——に留まらずに、知性にまで飛翔することを命じ、同時に、この権威がどんなに偉大なことをなするか、またなぜこのようなことをなしたか、また、いかにそれを小さなこととみなしているかを証しするのである」アウグスティヌス『秩序』第2巻第9章27（『著作集』1, 290）。

**「それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません」『コリントの信徒への手紙 二』5:16。

***「このようにして、今や「肉は何の役にも立たない」が、それは肉だけの場合である。愛が知識に付け加わり、大いに役立つように、肉に御霊が付け加えられるように。なぜなら、もし肉が何の役にも立たないとしたら、御言は肉となって、わたしたちの間に宿ることはなかったであろうから。もしキリストが肉を通してわたしたちに大いに役に立ったとしたら、どうして肉は何の役にも立たないだろうか。だが、御霊は肉を通してわたしたちの救いのため、あることを行いたもうたのである。肉は器であった。肉であったものではなくて、肉が内に含んでいたものに注意しなさい」アウグスティヌス『ヨハネによる福音書講解説教』第27説教5（『著作集』24, 62）。

23.

知恵と幸福を得ようとする者たちにとっては、私が以上述べたことにあたかも浸み入られる（pénétré）かのように全面的に納得していることが、絶対的に必須である。彼らがわたしの言ったことを信じ、一時の光のひらめきによって説得させられるというだけでは不十分である。それだけではなく、彼らが無数の経験と無数の異論の余地のない論証とによって、わたしの言葉を知るようになることが必須である。加えて、

これら諸真理が彼らの精神から消えることが決してなく、また彼らの生活におけるあらゆる研究やその他の仕事のなかにおいても、彼らに対して現れていることが必要である。

24.

いま公刊されるこの著作を、いくらかの傾注をもって読む労を執ってくれるひとびとは、もしわたしが誤っていないならば、上述の精神の状態に入ることになるだろう。というのは、本書でわれわれは次のことを数々の仕方で論証しているからである。すなわち、われわれの感覚や想像力や情念は、真理とわれわれの善の発見には少しも資さないということ。それどころか反対にあらゆる場合にわれわれをたぶらかし惑わすということ。そして一般に、精神が身体を通じて受け取る認識のすべて、および身体において生じる運動のいくらかは、身体の保存および身体に関する諸々の善を保存するためにはすこぶる有益であるにもかかわらず、それが表象する諸対象との関係においては、もっぱら虚偽に満ち錯雑である。

25.

また本書でわれわれは、数々の過誤に、主としてごくごく広くひとびとに受け入れられている、あるいは精神のきわめて大きな不順の原因である、そのような過誤に立ち向かう。そして、こうした過誤のほとんどすべては精神の身体との結合に由来するということを知らしめる。[以上を論じることでもって、]われわれは数々の箇所において、精神がまどろみから覚醒し、自身の解放のために何らかの努力をなすようにと、精神があらゆる感覚的事物に対して隷属し依存していることを、精神に感得させようと努めるのである。

26.

われわれは本書で、われわれの間違い²⁹について単に説明するだけでは満足せず、

29 「思い違い」と訳したその原語は «égarmens» (原文ママ) である。DCLF (1787) によれば、この語の本来の意味は「道を外れた旅人の勘違い」であり、ここから転じて、「精神の、または道徳の」逸脱を指すようであり、「哲学者の間違い」や「若りし頃の放蕩」といった意味での用例もある。おそらく本箇所は、前者に類するものであろう。

精神の本性についても本書の一部で (en partie) 説明する。またわれわれは主としては、たとえば感覚もしくは想像に由来する過誤を個々別々に徹底して枚挙すること³⁰にではなく、そうした過誤の原因に注目する。われわれは、これらの能力 [感覚と想像] およびひとの陥る一般的な過誤との説明において、あたかも無限のごとくに多くの、ひとの陥りうる個別の過誤を、一望のもとに示す。以上のように、本書の主題は人間精神のすっきり全部である。われわれは、人間精神をそれ自体において考察し、また身体との関わりにおいて、さらには神との関わりにおいて考察する。加えてわれわれは、人間精神のもつ諸能力の本性を吟味し、それが過ることを避けるためにわれわれがなすべきことを記す。最後にわれわれは、人間の認識を進展させる³¹ ために役立つとわれわれが考えた事柄の大部分を説明する。

27.

われわれのあらゆる認識のうち、もっとも美しくもっとも快適で (agréable) もっとも必須なもの、それは疑いなく、われわれ自身についての認識である。人間のあらゆる学問のうち、もっとも人間に相応しいもの、それは人間についての学問である。しかしながらこの学問は、われわれのこれまで手にしてきた学問のどれよりもいっそう開拓されいっそう成し遂げられた、そのようなものではない。[じっさい、] 普通のひとびとはこの学問をすっきり無視しているのである。[いやそれどころか、] 学問の素養を誇る者たちにおいてさえ、この学問に傾注する者はごくわずかであり、成功裡に傾注する者となればますます少ない。[すなわち、] 世間では鋭敏で通っている者た

30 ここで「枚挙すること」と訳したその原語は «dénombrément» である。訳語の選択にあたり、デカルト『方法序説』第二部の邦訳では「数え上げ」とされているが (Descartes 2001-1, 26)、依田 (2014) に倣うこととした。

31 「人間の認識を進展させる」と訳したその原文は «pour avancer dans la connaissance de l'homme» である。竹内訳は「人間についての知識に入るために」としている。たしかに、「人間の学問」がマルブランシュのプロジェクトであることを考慮すれば、「知識に入る」というのがいささか曖昧な表現であるとはいえ、内容的におかしくはない。だが、文法的に言って、自動詞 «avancer» と前置詞 «dans» の組み合わせは、基本的には「dans 以下において進展する」と訳するのが自然だろう (Robert 1988 では、「仕事は捗っているかい tu avances dans ton travail?」という日常会話の用例が挙げられている)。このように解した上で、「において進展する」ということと「を進展させる」ということとの間に、日本語としては大差がないとみなし、よりわかりやすい後者を選んだ。英訳が «for advancing the knowledge of man» と他動詞で訳しているのも (Malebranche 1997, xxxix)、おそらくわれわれと同様の理解によると思われる。

ちのほとんどは、精神と身体との間にある本質的な差異を、ひどく錯雑な仕方ではかわかっていないのである。[その証拠に、] この二つの存在をかくも鮮やかに区別した聖アウグスティヌスでさえ、長い間その差異を認められなかったと告白している*。それに、なるほど魂と身体との特性についてならば、彼は彼に先立つ者たちならびに彼に後続する当世までの者たちの誰よりもいっそう優れた仕方でも説明した、とわれわれは認めねばならないとはいえ、にもかかわらず、自身を取り巻く諸々の物体に、当の物体の媒介によってわれわれが知覚するあらゆる感覚的質を、彼が[帰したのだが、実のところ、] 帰さなかったらば、[その方が] 望ましかっただろう。というのは要するに、彼が物質についてもつ観念のうちに感覚的質が明晰な仕方でも含まれている、などということはまったくありえないからである。したがってわれわれは、ここ数年に至るまでは³²、精神と身体との相違が十分に明晰に認識されたことはない、といくらか確信をもって言うことができるのである。

*「私の心は物的なもろもろの形をたよりにすすみ、それ自体よってうるわしいものを「美なるもの」、何かに適合してうるわしいものを「適合せるもの」と定義し、区別しました。そしていろいろな物体の例を付け加えて説明しました。それから心の本性へと向かいましたが、霊的なものについてまちがった意見をいただいていたために、真実を認めることが許されませんでした。それでも真実の有する力そのものが私の目を射たのですが、私はおののく精神を非物的なものの考察からそむけ、輪郭や色彩や容量を有するもののほうへむかいました。そして、これらのものは精神のうちに見られませんでしたから、精神も見ることはできないと思ったのです」『告白』第4巻第15章24 (Augustinus 2014-2, 1, 186)。

28.

或るひとびとは、精神の本性を自分がよく認識しているのだと想像している。その他多くのひとびとは、精神の本性をまったく認識しないなどということもありえないのだと説得されている。残る最も多くのひとびとは、精神の本性を認識することによってどんな有用性があるのかを知らず、それゆえにこの認識を軽視している。しかしこれらの意見のすべては、彼らの精神が明晰判明に視たこと (vue) の帰結であるというよ

32 Rodis-Lewis は、1642年(つまり『真理の探求』の初版の32年前)のデカルト『省察』第二版が、その副題に『…人間の魂の身体からの区別が…』と掲げていることを指摘している。

りも、むしろ人間の想像作用と傾向性 (inclination) の結果である。[なぜ彼らがこうした意見をもつのかといえば、] それは彼らが、自身の弱さと脆さとを認めることによって、自らのうちに苦痛と嫌悪とを感得するからであり、また彼らが、知りたがりな (curieux) 探究や何らかの華々しさをもつあらゆる学問を気に入っているからである。彼らは常に自らの外に出ている [=正気を失っている] ので、自身に生じる秩序の乱れを知覚しない。彼らは自らを感得しないので、自分が好調だと考えているし、あろうことか自分自身の病を認識しこれを自ら治療しているひとびとにけちをつけ、こうしたひとびとは自分を癒そうと努めることでかえって病んでいるのだ、などと述べる。

29.

しかし、自然のもっとも深い秘密に分け入っていき、精神によって天に至るまで上昇し、深淵の果てに至るまで下降する、かの天才たちもまた、自分がなんであるかを思い出さねばならない。これらの偉大な [探究の] 対象は、彼らの目をくらますばかりだろう。[というのは、] これほどの事柄に到達するためには、精神が自らの外に出る必要があるのだが、自らを消散させる³³ ことなしに、自らの外に出ていくことはできないのである。

30.

ひとは、天文学者や化学者になって、望遠鏡にぶら下がったりかまどにひつついたりして一生を過ごし、そうしてその骨の折れる観察から得られるひどく無益な帰結を引き出す、このようなことのために生まれたのではない。或る天文学者が先駆けて月のなかの土地や海や谷を発見したことや、太陽の上を回る黒点を発見したことを、わたしは認める³⁴。或る化学者が、水銀を固定する秘訣をついに発見したことや、すべての物体を溶かすというファン・ヘルモントご自慢のあのアルカエストを作り出した

33 「自らを消散させる」と訳したその原語は «se dissiper» である。DAF (1694) には、雲や霧や晴らすもしくは散らす、といった意味の他に «Les esprits se dissipent» などとして «Ils s'évaporent» を意味するとあるが、この «s'évaporer» の項目には、空想にふけるとか、ほしいままに振る舞うとか、そのような用例が挙げられている。

34 Rodis-Lewis は、ガリレオ・ガリレイが 1610 年ごろに月の谷と太陽の黒点を発見したことを注記している (OC 1, 494)。

ことを、わたしは認める³⁵。それで、彼らはこのことによっていっそう知恵ある、幸福なものになれたのだろうか。[なるほど] 彼らはきっと世間で何らかの名声を得たのだろうか。だが、彼らがその名声に注意を払っていたならば、それは彼らの隷属を拡げてしまう (*étendre leur servitude*) だけだっただろう。

31.

天文学や化学やその他の諸学問は、紳士 (*honnête homme*) の気晴らしとしてはみなされてよい。だが、それら学問の華々しさにだまされたままでいたり、人間の学問よりもそうした学問を好むようであってはならない。というのは、天文学の考察する対象が大きく、輝いていて、われわれを取り巻くあらゆるものよりも上方に無限に引き上げられている、そのようなものであるということを理由に、いかに想像力がこの学問に対して何らかの偉大さの観念を結びつける (*attacher*) としても、だからといって精神はこの観念を盲目的に崇拜してはならないからである。精神は、自らの審判者 (*judge*) となり主人となり、理性を驚愕させる感覚的な見栄えの豪華さを、当の観念から剥ぎとらねばならない。精神は、自らの内的な光に従って、自らの感覚や想像による虚偽に満ち錯雑とした証言 (*témoignage*) に耳を傾けることなく、あらゆる事柄について判断を下さねばならない。そして、自らを照らす真理が放つ純粋な光に即して人間の学問のすべてを吟味するならば、精神は、ほとんどあらゆる学問を軽視し、われわれが在るところのものについて (*ce que nous sommes*) 教える学問を、他のあらゆる学問のいずれよりも、いっそう重視することになるだろう。

32.

それゆえ、真理へのいくらかの愛をもっているひとびとに対しては、彼ら自身が入念ないくらかの反省 (*réflexions*) を通じてあらゆる人間の至高の教師 (*maître*) に対して問いかけた上で、その教師から受け取った答えに従って、本書の主題 (*sujet*) について自分で判断を下すよう勧めることの方が、彼らにとってはきっと月並みな文句とも空虚な装飾とも見えるだろう大袈裟な叙述 (*discours*) によって当の答えを予告することよりも、私にはずっと好ましい (*aimer*)。もしひょっとして本書の主題

35 Rodis-Lewis によれば、ファン・ヘルモントは万物の原理は水だと考えた上で、万物を溶解させる「アルカエスト *alcahest*」なる物質を作り上げた (OC 1, 494)。

が傾注と研究に値すると彼らが説得されてくれるなら、私は改めて彼らにお願いするが、この主題が含んでいる諸々の事柄について、それが表現される仕方の善し悪しに基づいて判断を下すことなく、つねに自分自身に立ち帰り (rentrer)、自分自身のうちで、それに自身が従うべきでありかつそれに基づき判断を下すべきである、そのような諸々の判決 (décisions) を聴くように。

33.

ひとは互いに教え合うことはできないし、われわれの声を聴くひとびとの耳にわれわれが語った真理を彼らが学び知るのは、ひとり、諸真理をあらわにするあのもの [= 神] が彼らの精神にもそれらを顕示するときだけである*。本書をしっかりと読もうとしてくれるひとびとが、以上のことにわれわれ同様説得されてくれるならば、その上でわれわれは警告しなければならないと思うのだが、傾向性によってわれわれの言葉を信じたり、われわれが語ることに對して敵意に基づき反対したりすることのないように。というのは、私は入念な省察 (méditation) を通じて学び知ったこと以外には何も新たに提唱しはしなかったと思うのだが、それにしても、他のひとびとがわれわれの諸々の意見を知らないままにそれを心に留めたり信じたりして満足することになるとしたならば、あるいは、彼らの理解の誤りのゆえであれわれわれが誤ったゆえであれ、いずれにせよ彼らが何らかの過誤に陥ることになるとしたならば、私としては実に腹立たしい (fâché) からである。

*「今ここで大いなる秘跡に注目してください！ 兄弟姉妹の皆さん。私たちの言葉の音は耳を打つのです。だが、〔真の〕教師は内奥におられるのであります。誰も人間の〔教師から〕何かを学ぶのだと考えてはならないのです。もし教える方が内奥にいないとすれば、私たちの声の響きは無益なのです。兄弟姉妹のみなさん！ そのことを知りたいと思われますか。この講解をすべて聴いて帰りたいとは思われませんか。何と多くの方々が教えられることなくここから出ていかれることでしょうか！」アウグスティヌス『ヨハネの第一の手紙講解説教 *Tractatus in epistolam Ioannis ad Parthos*』第3説教, 13 (『著作集』26, 453)。

「もしあなたがたがわたしの言ったことを理解しさえしたなら、このわたしが語ったことは確かであり、わたしのことばは響いたし、音声により耳に達したし、あなたがたが理解していたなら、あなたがたの聴覚を通してその意味を心に伝えたのである。

…それを、つまり聞くことと理解することとを区別しなさい。聞くことはわたしを通して生じているが、理解することは誰を通してなのか。わたしはあなたがたが聞きうように耳に向かって語ったが、あなたがたの心に向かってだれが理解できるように語ったのか。疑いの余地なく、あるかたが、単にあのことばの響きあなたがたの耳を打つだけでなく、あなたがたの心に真理の何かが下っていくために、あなたがたの心に向かって何かを語ったのである。あるかたがあなたがたの心に向かって語ったのに、あなたがたはその人を見ていない。兄弟たち、もしあなたがたが理解したなら、あなたがたの心にも語られたのである」『ヨハネによる福音書講解説教』第40説教, 5 (『著作集』24, 212-213)。

34.

幾人かの学者たちは、ご当人の言葉に基づいてご当人を信じるようにとひとに望むが、この傲慢さはわれわれには耐え難い [ほど不愉快である] ように思われる。彼らがすでに語ったことを、ひとが神に対して問いかけている、などと彼らは文句をたれるが、[なぜそのことについてひとが改めて神に問いかけるねばならないかと言えば、]それはこの学者たちが自分自身について神に問いかけていない [ので、真理を語ることができていない]からである。彼らは、ひとが自分の意見に反対するやいなや苛立って、真理の、精神を照らす純粋な光よりも、彼らの想像の [産物である] 暗闇を好むよう絶対的に要求するのである。

35.

しばしばひとが、われわれもこうした [学者たちのような] やり方をしているものとみなすとしても、[実のところ、] われわれは神のおかげで、このやり方から実に遠ざかっている。われわれは、われわれに先立つ著述家を、あたかも「指導生」(Moniteurs) としかみなさない。ひとがわれわれをあたかも賢者や教師であるかのようにみて、われわれに耳を傾けてくれるよう望むのは、われわれにとって不正義 (injuste) であり虚しいことだろう。たしかにわれわれは、われわれが引き合いに出す事実や経験に関しては、これを信じてくれるようひとに要求する。なぜなら、これらの事柄は、いかに精神を至高にして普遍的な理性に傾注しようとも、学び知られることはないからである。だが、事物の真なる観念においてあらわになり、永遠真理がわれわれの理性の最も内奥においてわれわれに表象する、そのような諸真理のすべてに関しては、われ

われがこれについて思ったことに注目し [すぎ] ないように、ひとにはっきりと注意を喚起したい。というのもわれわれは、そのようにして諸々の [ひとびとの] 精神を支配して、自分を神になぞらえることが、ほんの軽い罪だとは思わないからである*。

*「ずっと以前は暗闇であったあなたたちは、理由なしに光となったのではない。それはただ、あなたたちが照らされたからなのである。あなたは自分自身が光であると考えてはならない。その光は、この世に来るすべての人を照らす光なのである」アウグスティヌス『詩篇注解』第25篇II「民衆への説教」11（『著作集』18/I, 253）。

36.

本書を読まれるひとびとが自身の力のすべてをかけて傾注してくれることを私は大いに願うが、その主要な理由はといえば、私が犯したかもしれない誤りをとがめて欲しいからである。というのは、私は自分が不可謬（infaillible）であるとは想像していないからである。ひとというのは身体ときわめて緊密な結びつきをもつものであり、身体にきわめて強く依存するものなので、われわれとしては、身体が想像に響かせる錯雑とした騒音を、精神に語りかける真理の純粹な声からつねによく峻別（discerner）しなかったのではないかと懸念するのが理に適っている。

37.

もし仮に神の他には語るものがおらず、われわれは聴いたことにのみ従って判断を下すとしたならば、おそらくわれわれはイエス・キリストの次の言葉を借用することができる。「わたしはただ聴くままに裁く。わたしの裁きは正しく、真である」*。しかし [実際には] われわれは身体をもっており、これは神にさえまさって声高に語り、しかも一度も真理を語らない。われわれは自己愛（amour propre）をもっており、これは真理をつねに語るもの [=神] が発する言葉を墮落させる。われわれは傲慢さをもっており、これは真理 [=神] の応答をまつことなく判断を下すのだが、[実のところ] この応答は、それに従ってわれわれが判断を下すべきものなのである、なぜ [これに従うべきかという] なら、われわれの過誤の主要な原因は、われわれの判断が精神による明晰に視えたもの（vue）を超えて拡がっていく（s'étendre）ことにあるからである。それゆえわたしは、人間が傾注するにわけてもふさわしい主題を扱う試論

としてわたしが提示する本書が徐々に完全になっていく (se perfectionner) ことのできるように、神がわたしの〔議論の〕乱脈を知らしめることになるひとびとに対して、わたし〔の議論〕を立て直してくれるようお願いする。

*「わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行おうとするからである」『ヨハネによる福音書』5:30。

38.

私が本書を著したそのはじめの意図 (dessein) は、自分を教育し、よく思惟し、わたしが思惟するところを明瞭に開陳する、といったことにあった。しかし、いくらかのひとびとが本書を公にすることが有益だと考えてくれたし、私としても、本書を私自身にとって有益なものとしたいという欲望 (désir) に、彼らの〔そう考える〕理由の主要なものひとつが一致したからには、それだけいっそうすすんで (volontiers) 彼らの理由に従ったのである。彼らが言うには、或る題材について自らを教育するための真正の手段は、それについて自分のもっている意見を碩学に提示することである。こうすることは、われわれの注意と彼らの注意とをともに刺激する。碩学というのは、しばしばわれわれとは異なる見解 (vues) をもち、われわれとは異なる諸真理を発見するものであるし、また、しばしばわれわれが怠惰のために無視していたり、勇気と力の欠乏のために放棄していたりする、そのような何らかの発見を推し進めるものである。

39.

私が思い切って著述家となったのは、わたし自身と他のひとびととの利益についての上述の見解のためである。しかし、わたしの希望がまったくもって虚しいものにならないように忠告しておきたいのだが、生活のあらゆる場面でわれわれが信じてきていて、しかもあらゆるひとびとと時代を通じて一般的に認められてきたとわれわれがみるような、そのような通常の意見を揺るがす事柄をわれわれが見つけ出すとしても、はなからそうした事柄を突っぱねるべきではない。このような〔仕方で突っぱねる〕ことは、もっとも一般的な過誤であり、〔むしろ〕わたしは、主としてこうした過誤を破壊しようと努めたのである。〔これが過誤であるのはなぜかといえば、〕もしひと

びとが強く照らされているとしたなら、承認は「承認されるものが真であり、そうでないものが偽であることの」ひとつの理由となるだろう。だが、「この仮定は、実際には」まったく逆である。それゆえ、一度かぎり警戒していただきたいのだが、人間的意見で、信仰といっさい関係しないものについての判断をつかさどるのは理性だけであって、「他方、」ひとりこの信仰のみを、自然的な諸々の事柄をあらわにするのとはまったく異なる仕方で、神はわれわれに教えるのである。われわれの理性がいつそう照らされるように、自らのうちに立ち帰って (revenir)、自らを絶えず明るくする (luminer) 光に近づいていただきたい。あまりに鮮烈な感覚のいっさいと、われわれの虚弱な知性の力量 (capacité) を満たしきってしまう魂の情動 (émotions) のいっさいとを注意深く避けていただきたい。というのは、ごくごく小さな騒音であれ、ごくごくわずかな光のひらめきであれ、しばしば精神の視線 (vue) を乱してしまうのだから、こうした事柄のすべてを避けることは、絶対的に必須でこそないにしても、よいことである。そしてもし、あらゆる努力 (effort) を傾けても、われわれの身体とわれわれの子供時代からの先入見とがわれわれの想像力に刻み込む恒常的な印象に抵抗することがわれわれにはできないならば、われわれ固有の力 (forces) では手にすることのできないものを受け取るためには、感覚への抵抗をやめることなく、祈りに訴えることが必須である。というのはこれこそが、アウグスティヌスを模範とし、真理に対する多大な愛をもつひとびとにとっての、常なる仕事なのであるから。「もしわれわれが身体的感覚によって加えられた打撃や傷に魅了されるとしたら、それらに抵抗することはわれわれにとって最も神聖なる義務である。」書簡七、ネブリディウス宛*。

*『著作集』別巻 1, 34.

訳語表

本稿で選択した訳語のうち、訳によって判断がわかれそうなものの一部を挙げた。必ずしも重要な術語を網羅しているわけではないので、索引として使うには不十分である。

※原語は次のように記す。動詞は不定形に直す。形容詞は男性単数形に直す。名詞は、単数と複数での用例を区別するために、原文ママで記す。その他、副詞などは原文ママで記す。ただし、このすべてについて、発音記号などは現代の記法に合わせる。

原語	訳語	段落
âme	魂	2, 5, 7, 10, 12-13, 21, 27, 39
application	傾注	18, 22, 24, 32, 35, 37
s'appliquer	傾注する	27, 36
s'arrêter	注目する	22, 26, 35
attention	注意	21, 38
audace	大胆さ	37
clair	明晰な	14, 28, 37
clairement	明晰に	27
confus	錯雑とした	12-13, 17, 24, 31, 36
confusément	錯雑とした仕方で	27
connaissance	認識	3, 5, 13, 24, 26-28
corporel	物的	1
corps	物体／身体	1-5, 7-10, 12-13, 16-18, 20-22, 24-27, 30, 36-37, 39
distinct	判明な	28
éclairer	照らす	5, 6, 14-16, 20, 31
émotions	情動	39
erreur	過誤	1, 17, 25, 26, 33, 37, 39
estimable	重視すべき	10
estime	重視	22, 31
estimer	重視する	8, 10

etre uni	合一する	1-5, 10, 13, 15
faususement	誤って	4
faute	誤り	36
faux	虚偽に満ちた	24, 31
félicité	至福	1, 8, 18
gloire	栄光	10-11
image	似姿	2
intelligence	知性	19, 39
intelligible	叡智的	14
luire	輝く	15
luire à	明るくする	39
manifestation	顕示	13, 21
manifester	顕示する	33
matérielles	物質的な	1
matière	物質	1, 27
	題材	38
nature	本性	1, 4-5, 20, 26, 28
	自然	14, 29
naturel	本性の	1, 3, 39
naturellement	本性的に	2
s'occuper	専念する	8, 10, 22
orgueil	傲慢(さ)	34, 37
passion	情念	10
passions	情念	6-7, 11, 13-14, 17-18, 24
persuader	説得する	23, 28, 32, 33
préjugés	先入見	4, 39
principal	主要な	1, 7, 12, 36, 37, 38
principalement	主として	25, 26, 39
principe	原理	19
représenter	表象する	20, 22, 24, 35
sens	感覚	4, 5-7, 17-18, 22, 24, 26, 31, 39

sensation	感覚作用	21
sensible	感覚的な	5, 10, 15-16, 20, 22, 25, 27, 31, 39
sentiment(s)	意見	8, 33, 34, 38
sentiments	感得	13
sentir	感得する	5, 6, 16-17, 25, 28
souverain	至高の	1, 17, 32, 35
tromper	欺く	13, 18
se tromper	誤る	18, 24, 33
union	合一	1-2, 6-7, 15-17, 20, 22, 25
unir	合一させる	3
vérité	真理	2, 4, 5, 13, 14-15, 17-18, 20-21, 24, 31-32, 34-37, 39
Vérité éternelle	永遠の真理	13, 20, 35
vérités	諸真理	12, 21-23, 33, 35, 38

訳者あとがき

このあとがきには、これを訳出した理由、および訳文に関する注意点を手短かに記す。同書を訳出した理由はきわめて単純であって、その哲学的な重要性にもかかわらず、今日では同書を日本語で読むことが困難だからである。管見のかぎりまとまった既訳は竹内訳（Malebranche 1949）と山田訳（山田 2001）のみである。後者は、第三巻第二部「観念の本性について」の第一章から第七章の部分訳である。たしかにマルブランシュの認識論にとってきわめて中心的なテキストではあるが、同書の全体像を掴むには十分ではない。前者については、後述のようにきわめて優れた訳文であるが、絶版であり、古書としても希少となっている。また、同訳書の出版からは70年以上の歳月が過ぎていることもあり、いくつかの訳語については更新が必要である。以上の点だけでも、『真理の探求』の翻訳を作成することの必要性は十分に理解されるだろう。とはいえ、ここに訳出できたのも序文だけである。本書はあまりに大部であり、これに一度に手を付けるだけの力量は訳者にはなかった。しかし序文には、同書の構成や意図はもちろん、マルブランシュ哲学の枢要な見解が散見される。その点では、ここに掲載されたのはきわめて拙くしかも短い翻訳であるが、このような手に取りやすい形態で公開できたことは、訳者を含めあらゆる哲学の徒にとって、幾らかの利益となるのではないかと期待している。本稿の訳はとて読みやすい優れたものとは言い難いが、力の及ばぬところは多々あったとはいえ、せめて誰かがマルブランシュの原書を読み解くとき、その介助となれば幸いである。少なからず誤訳も見られるだろうが、その際には本訳文が「徐々に完全になっていくことができるように」、読者諸賢にご教示を賜りたいところである。

底本としたのは、無料公開されている Jules Simon 版の『マルブランシュ著作集』第二巻（1842）である。ただし、校訂や注釈など多くの点で André Robinet 版『マルブランシュ全集』第1巻（1962.『真理の探求』の校訂・注は Geneviève Rodis-Lewis による）を参照し、これに従った。Simon 版と Robinet 版で異同が見られる場合には後者に倣う。なお、Bardout の校訂版も参考とした。

邦訳は竹内訳を参照し、これに多くを学んだ。（竹内の訳文は、旧字体を用いてこそいるが、時代を感じさせない明晰かつ平易な文体であり、その点では拙訳よりもよっぽど優れたものだと思う。）また、英訳（Malebranche 1997）も適宜参照した。

アウグスティヌスからの引用は、基本的には『アウグスティヌス著作集』の訳に倣っ

だが、『告白』は山田晶の訳を、『神の国』は金子晴勇の訳を、それぞれ用いた。またいずれについても、『真理の探求』の各校訂版および訳書に付された引証を参考にしたが、或る程度引用文中の文脈が見通せるよう、比較的長めに引用した。

聖書からの引用はすべて新共同訳に倣った。ただし、『知恵の書』からの引用は文献表に記載の邦訳から行った。

訳語の選択に際しては、基本的には同書の竹内訳、『形而上学と宗教についての対話』の井上訳 (Malebranche 2005)、それからいくつかの研究書 (伊藤 1997、山田 2001、鈴木 2007、木田 2009、依田 2014、etc.) を並べ見比べ、その都度判断した。だが、マルブランシュの引用するアウグスティヌスの語彙、それからデカルトやライプニッツなど、フランス語で執筆した同時代の哲学者の用語法などとの関連も視野に収めなければならず、訳者の力量を超えるところがあったのも否めない。基本的には一仏語に一日本語をあてる仕方で訳し分けを試みたが、文脈上そうもいかないところもあった。こうして訳語の選択については頭を悩ませたあげく、完璧な語をその都度当てるのはほとんど不可能に思われたので、読者のお気に召さない点についてはせめて各自で容易に変更していただけるようにと、この翻訳の末尾に「訳語対応表」を作り、重要と思われるものの一部を記した。また、ニュアンスやコンテクションを一語のうちに反映しきれなかったものは、脚注にその旨を記した。これ以外で、標準的な訳語ではあるが原語を示した方がよいと思われたもの、文中の語彙の繋がりを明示すべきものなどは、本文中に原語を併記した。

辞書は、基本的に 1694 年に出版されたアカデミー・フランセーズのフランス語辞典の初版を最も重視した。そこに掲載されていない語や語釈が必要となった場合には、18 世紀 - 19 世紀の辞書を参考とした。また、特に現代の用法と対照したり、日本語としてじっくりくるものを探したりする段階で、小学館の『ロベール』を参照した。

訳注は、以上の訳語に関するものと、最低限の書誌情報に関するものだけを記した。内容に関する踏み込んだ注釈は、始めると際限がないし、訳者の力の及ばないところでもあるので、記さなかった。

最後に、今回ここに掲載した訳文は、訳者の主宰する学生主体の「マルブランシュ読書会」の成果である。参加者の皆さんには、フランス語の文法から議論の解釈に至るまで、さまざまな点でお付き合いいただき、大いに助けていただいたこと、記して感謝を申し上げる。

文献

フランス語辞書

- DAF (1694) : *Dictionnaire de l'Académie Française*, 1st edition. Paris.
- DAF (1762) : *Dictionnaire de l'Académie Française*, 2nd édition. Paris.
- DCLF (1787–1788) : Jean-François Féraud. *Dictionnaire critique de la langue française*.
Marseille.
- Littré (1873–1878) : *Dictionnaire de la langue française*, 2nd edition. Paris.
- Robert (1988) : 『ロベール 仏和大辞典』小学館.

ラテン語辞書

- DMLBS: R. E. Latham, D. R. Howlett, R. K. Ashdowne. (2013). *The Dictionary of Medieval Latin from British Sources*. London: British Academy.
- Gaffiot: F. Gaffiot. (1934). *Dictionnaire Latin-Français*. Paris: Hachette.
- Lewis & Short: C. T. Lewis, C. Short. (1879). *Latin-English Lexicon*. Oxford: Clarendon Press.

マルブランシュのテキスト

- OC: *Œuvres complète de Malebranche*. A. Robinet (direction). 20 vols. Paris : C. N. R. S. 1958–1967. (全集版からの引用は、略号に続けて巻数、頁数をアラビア数字で記す。)
- Malebranche, N. (1842). *De la recherche de la vérité*. in J. Simon (ed.), *Œuvres de Malebranche*. 2^{ème} série. Paris : Charpentier.
- (2006). *De la recherche de la vérité*. J. -C. Bardout (présentation, édition, notes). 3 vols. Paris : Vrin.
- (1997). *The Search after Truth*. T. M. Lennon, P. J. Olscamp. Cambridge: Cambridge University Press.
- (1949). 『真理の探究 第1』竹内良知識・創元社.
- (1948–1949). 『基督者の瞑想 上・下』岳野慶作訳・中央出版社.
- (2005). 『形而上学と宗教についての対話』井上龍介訳・晃洋書房.

——(2001).「マルブランシュ「観念の本性について」」山田弘明訳・山田弘明著『真理の形而上学』世界思想社.

参考文献

- 『聖書 新共同訳 引照つき』共同訳聖書委員会. 1993.
- 『知恵の書：聖書原典からの批判的口語訳』フランシスコ会聖書研究所. 1960.
- Ambrosius. (1845). *Hexæmeron. in Patrologiæ cursus completus, series 1^a, tomus XIV, Sancti Ambrosii Opera Omnia, tomus 1, pars 1.* Paris: Migne.
- Augustinus. (1979–2013).『アウグスティヌス著作集』全32巻, 教文館。(著作集からの引用は、『著作集』と記した上で巻数、頁数をアラビア数字で記す。)
- (2014-1).『神の国 上・下』金子晴勇他訳. 教文館.
- (2014-2).『告白』山田晶訳. 全3巻, 中公文庫.
- Descartes, R. (2001).『デカルト著作集 増補版』全四巻, 白水社.
- (2004).『デカルト『省察』訳解』所雄章訳・註解. 岩波書店.
- Hobbes, T. (2015).『物体論』本田裕志訳. 京都大学学術出版会.
- Leibniz, G. W. (1990).『弁神論 上・下』,『ライプニッツ著作集』第I期, 第6巻 – 第7巻, 工作社.
- Scotus, D. (2019).「第一原理についての論考」小川量子訳.『中世思想原典集成 精選』第6巻, 平凡社.
- Spinoza, B. (2014).『エチカ 上・下』畠中尚志訳. 岩波書店.
- 伊藤泰雄. (1997).『神と魂の闇:マルブランシュにおける認識と存在』. 高文堂出版社.
- 木田直人. (2009).『ものはなぜ見えるのか』中公新書.
- 鈴木泉. (2007).「マルブランシュ」小林道夫編『哲学の歴史』第5巻, 中央公論新社.
- 依田義右. (2014).『マルブランシュ:認識をめぐる争いと光の形而上学』ぷねうま舎.